
ブリーチ 氷の少女

真菜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブリーチ 氷の少女

【Nコード】

N9595V

【作者名】

真菜

【あらすじ】

生まれた頃から、人ならざる者が見える。でもそれは誰も知らない。人とは違う容姿を持っている。だから誰もが避ける。家族はいない。だから一人で生きていける。

少女——朝風冬菜はそういう環境で育ってきた。が、虚に殺された。そして流魂外で生き始める。自分を信じて……………。

少女

私は小さい頃からいろんな物が見えた。

幽霊・虚・死神。いわゆる、“人ならざる者”。

小さい頃といっても、詳しく言うとき生まれたときから。生まれたときから私の周りには知らない者でいっぱいだった。でも見えることは誰にも言わなかった。言ったら避けられそうな気がしたから。

だから、見えないことにする、聞こえないことにする、話しかけられても知らない振り。

でもそんなにうまくはいかなかった。

10歳のとき私は、私の力を欲して襲ってきた虚に殺された。けどその虚は私を食わずにいなくなった。虚は人の魂を喰らう者、そう思っていたからおかしいと思った。そして理不尽だと思った。何で私は殺されたのだろうか。

けれど考えているうちに私の意識は闇に奪われてしまった。

思えば私には家族がない。いや、いることにはいるけど家族と思っ
ていない。

私の髪は水色がかった銀色、瞳は深緑色をしていた。両親はそれで
喧嘩になった。父さんも母さんも黒髪の黒い瞳。なのに私は違った。

父さんは、母さんが浮気をしたんだといって離婚した。そして私は
母さんに引き取られた。母さんは納得していなかった。それで裁判
を起こした、私のDNA鑑定とともに。

結果は、私にはどちらの血も流れていないと分かった。確かに母さ
んがお腹を痛めて生んだ命、なのにそれには自分の血は流れていな
い。だから私と母さんは他人。

父さんと母さんに子供はいない。私が最初で最後の子供であり、他
人の子。だから私が死んでも誰も悲しむことはない。

記憶から目を覚ますとそこは村だった。私はいつの間にか着物を着ている。

そうだ、ここはよく死神が言っていた流魂街。私はどこかの野原に寝転がっていた。いや、倒れていた。近くに湖があった。そこで顔を洗う。水面に映る私はいつもと変わらない髪と瞳。

これから私はここで一人で生きていく。

西流魂街1地区潤林安。少女、朝風冬菜の生活は始まった。

流魂街

私が死んでから、もう一週間。ここ潤林安は平和な村。正確には、普通の人にとっては平和。

私にとっては、とても平和とは言えない。だって、みんなが私を避けるから。

ここでも私の見た目はおかしいらしい。みんな「氷みたいだ」って、近づこうとしない。私は一人、でも今までと何も変わらない。生きている頃から人とは一緒にはいられなかった。

この容姿のこともあるし、みんな私の周りには冷気が漂っていると言っていた。その意味は私には分からない。

平和なこの村では不憫なことは何もない。あるとすれば食料を調達できないこと。誰も私に食べ物をくれない。貫いにいくと「化け物」って言われる。そんな日々。

だから私はこの村を出ていった。向かった先は、戌吊。そこは少し荒れた場所、でもきつと食べ物があるはず、そう思っって行った。

着くと喧騒に溢れていた。ここならきっと大丈夫、何となくそう思った。

周りには普通とは違う髪の色をした人が何人かいた。でもごく微量。

私は思い切ってその人たちに話しかけてみることにした。

「あ、あの……」

「はい？ ひゃっ」

「ご、ごめんなさいっ」

「え？ あの…」

何故かその人たちは私をみるなり謝り、走り去ってしまった。
ああ、私はここでも嫌われるのか。そう思ったときだった。

「ねえ、君」

「え……？」

声をかけてきたのは、赤い髪の女の子。その瞳は澄んだ黄色をしていた。

「私は鈴梨焰^{すずなしほむら}。あなたは？」

「私は…朝風冬菜」

「見た感じ違うところの人だね？どこから来たの？」

「え…と潤林安から…」

自分で喋っていて長年気づかなかったことに気づいた。

“私は人と喋ることが難しい”
ハッキリ喋ることができない、何を言えいいのか分からない。

でも、この人は気にしていないみたいだった。

「潤林安！？あそこっていいところじゃない！どうしてそんなところから？」

「私…みんなに嫌われて…それで…居場所がなくて…」

「私と同じだね」

「え……?」

「ここにも嫌われてる人は沢山居るよ。でも、私は一番嫌われてる

の。みんなね、この目が怖いんだって」

ここでも嫌われている人が居る、それだけでも私の心の支え。私だけじゃないんだ、って。

それ以前に、こうして私に話しかけてくれる人が居る。それが何より嬉しかった。

「あ、あの……どうして……さっきの人たちは……逃げ……ちゃったの？」

「きっと、冬菜ちゃんの髪の色じゃない？」

やっぱり私の髪は誰にも受け入れられないんだ。

「でも、私はその色綺麗だと思うよ！」

「本当!？」

「うん!!」

初めて人に褒めてもらえた。ずっと避けられて、一人だった私に初めて心の支えができた気がした。

「冬菜ちゃん、うちにおいで! きっと、住むところないでしょ? 私

も一人だから来てくれると嬉しい!」

「いいの? 私なんかで…」

「私“なんか”って言わないで! 冬菜ちゃんだからいいの!」

初めてできた友達、そして初めてできた私を受け入れてくれる人。
ここでは初めてのことがいっぱいだった。

「それでさ、“冬菜”って呼んでいい?」

「っ!」

「だから私のことも“焰”って呼ぶこと」

「ほ…むら」

「そっ」

泣いた。声を上げて泣いた。大粒の涙を流して泣いた。周りの人が
変な目で見る人も気にしないで泣いた。

焰は最初の友達。

出会いと別れ

「冬菜、早く！」

「待って焰！」

戌吊に来てから一ヶ月。冬菜はこの生活に馴染んできていた。この日も二人は食べ物を盗んでいた。ここでは盗まないと食べる物が無い。それはこの二人にとってはいい条件でもあった。

「焰、村はずれにある野原に行かない？」

「野原？ いいよ！」

冬が近いこの季節。野原は誰もいなかった。

そこに二人で寝転び、空を仰ぐ。

「私、まさかこんなに楽しく生活できるなんて思ってもなかった」

「どうして？」

「だって、生きていた頃からずっと一人だったから」

冬菜の言葉に、焰は特に驚いた様子も見せず、逆に笑った。

「でも、もう一人じゃないでしょ？」

「!!……………そうだね！」

そして冬菜も笑った。

「私さ、ずっと冬菜と過ごしてきてなんで皆が近づかないか分かった」

「え？」

「だって、冬菜は力を持ってるもん。すごい霊圧を」

「霊圧？」

聞きなれない言葉に、頭がついていけない冬菜。でも自分の何かのせいで、誰もが近づこうとしていなかったということは分かった。

その時だった。

「ヴォオオオオオオ!!!!」

突然の咆哮。

「な、何!?!」

「この感じ……虚だ! 焰逃げて!?!」

そして二人の目の前に虚が現れた。3 mの大きな虚。

「霊圧……その力……よこせ」

「!?! 霊圧!?!」

「焰逃げて! こいつの狙いはきっと私。だから……」

「なんで!?! そんな事分からないじゃん!?!」

「分かるよ! だって……だって」

冬菜は唇をかみ締めた。そして言った。

「私は、私の霊圧を欲した虚に殺されたんだから!」

焰を突き飛ばし、

「来なさいよ化け物！アンタの狙いは私でしょ！」

村と反対の方向に駆け出した。

「冬菜！」

「焰は村の皆に注意を呼びかけて！」

「ちょっと！」

止める声も聞かず、冬菜はとにかく走った。虚はその後を追いかけた。虚は早い。小さな冬菜がいくら走ってもすぐに追いついてしまった。

「その力…くれ」

「あ…ああ…」

虚が爪の鋭い手を振り上げたとき、冬菜は死を覚悟した。そして、その手を振り下ろし、

ザクウツ

辺りを鮮血で染め上げた。冬菜の体には傷一つ付けずに。

「!!!!!! 焰!!!!!!」

そこにいたのは焰だった。

「よかった。無事で」

「良くない! 何で!?! どうしてこんなこと!」

「だって…冬菜には…生きて…欲しいか…ら…」

だんだんと弱くなる呼吸。力が抜けていく手。

「嫌だよ、死なないで!」

「冬菜……今までありがとう」

淡く体が光り、霊子の粒となって焰は空に舞い上がっていった。

「いやあああああああ！！！！」

その瞬間を待っていたかのように、虚が走ってきた。今度こそ死を覚悟した。死んでも焰が待っている、という思いで。

しかし、

【月牙天衝！！！！！！】

黒い疾風が虚を吹き飛ばした。

「！？」

「大丈夫か？」

そこに現れたのは死神。オレンジ色という目立つ髪 of 死神。

「何で…」

「？」

「何で助けたのよ！」

叫ぶ冬菜に死神は戸惑うような顔になった。

「このまま死なせてくれたら、焰の元に逝けたかもしれないのに……！！！」

「それでどうするんだ？」

「！？」

「お前が死んで喜ぶ奴がいんのか？」

「いるよ！みんな私なんていないほうがいいって思ってる！焰は……たった一人の友達だったのに……」

死神は今度こそ言葉を失った。そして自分の頭をグシャグシャとかいた。

「あーそうかよ。だったら勝手にしろ」

その場を立ち去ろうとしたとき、冬菜は死神を呼び止めた。

「名前を…名前を教えて」

「! ! ……一護。黒崎一護だ」

「黒崎さん、私死神になります。そしたらあなたを倒します!」

「! ?」

「だから私を助けたことを後悔してください!」

そういつて、冬菜は走り出した。が、その途中で足を止めて死神のほうを向いた。

「私は朝風冬菜です。忘れないでくださいね!」

そしてまた走りだした。その場に残された死神——一護は苦笑いをした。

（あいつ、死神になったらとんでもない奴になるな。そう霊圧をしていた）

既に姿が見えなくなった冬菜を見て、そう思った。

真央霊術院

『私、死神になります』

その決心は本物だった。

黒崎という死神と約束した後、冬菜は入学の申込みをした。

そして入学試験を難なく合格していった。斬術・鬼道・筆記試験。全てをトップクラスの成績で通過していった。最後の面接試験のとき、『どうして死神になりたいのか』という質問に対し、冬菜はこう答えた。

「私は生きているころ虚に殺されました。そして、ここでもたった一人の親友を虚に殺されました。だから私はこれ以上そういう犠牲を出さないために、沢山の人を守るために死神になりたいんです。いえ、なって見せます！」

「特進クラスか……。頑張ろう」

冬菜は思った。ここでも人に避けられるかもしれない、でも私には私を受け入れてくれる人がいた、だから耐えて見せると。

「朝風さん、入ってください」

先生に声をかけられ、教室に入る。彼女を見た生徒たちの目は冷たかった。

背が小さい、体が細い、そして何より髪と瞳の色。教室のあちこちでコソコソとささやき声が聞こえる。

やはり耐えられないかもしれない、そういう考えが頭をよぎる。それでも頑張ろうという気持ちで乗り越えてやる、と決心した。全ては死神になるために。

「朝風冬菜です。これからよろしくお願いします」

それだけ言って席に着いた。

「それでは斬術の授業をしますので、道場に集合してください」

先生の言葉で各々移動を始めた。

「皆さんペアは作れましたか？」

二人一組でやるこの授業。ほとんどの者が仲のいい人同士で組んでしまったため、冬菜は残ってしまった。

「お前、組む人いないんだろ。俺が組んでやるよ」

そんな冬菜に声をかけたのは、彼女の二回りほど体の大きい男子だった。

「はい。お願いします」

そんな事は気にせず、承諾する。すると、あちこちからいろんな声が聞こえた。

『あいつバカだな。竜王さんと組むなんて』

『ああ。竜王さんは真央霊術院で一番つよいの知らねえからじゃねーのか？』

『ま、あんなチビが泣くところ、見てみたいしな』

どうやら、自分の目の前にいる人物は、相当強いらしい。確かにがっちりとした体は、とても細い冬菜からして、勝てそうにない相手だった。更に、冬菜は小さいため竹刀を引きずるように持っていた。

「なんでお前みたいなチビが特進クラスに来れたのかは知らないが、来たことを後悔させてやるよ」

「そうですね。後悔してしまうかもしれませんね。私よりもあなたが」

「ハア？何言って…」

竜王が言葉を言い終える前に、冬菜は竹刀を振り上げとてもその体からは想像もできないスピードで技を繰り出した。

「デメエ！何しやがる！」

「これくらい反応できないと、本当に後悔することになりますよ」

徐々に上がる冬菜の霊圧。その霊圧に対抗するように、竜王も霊圧を上げる。道場に緊張が走った。

誰かがつばを飲んだ音と同時に駆け出す。竹刀を振り下ろす竜王だったが、既にその冬菜の姿はなかった。驚く暇もなく首筋に来る衝撃。それは確実に彼の意識を奪った。

「よく考えることです。何故私が特進^{こしん}クラスに来ることができたのかを」

直後に冬菜を迎えたのは―――拍手と歓声。

冬菜は驚きを隠せなかった。たかが一人を倒しただけで、拍手が来るとは思っていなかったために。

「すげーよお前。あの竜王さんを倒すなんて！」

「かっこよかったわ！」

しかし彼女が倒したのはたかが一人ではなかった。人々の中にある

“常識”を覆し、“勇氣”を生んだ。竜王を倒したことは、それほどすごいことだったのだ。

「よかったら、友達になってくれない？」

「私も！」

「俺も良いか？」

「！？どう…して？」

信じられなかった。こうして友達になろうとしてくれる人が居ることが。

「私が怖くないの…？」

「確かに最初は不気味だと思ったぜ？」

「でも、そんな事関係ないよ。朝風さんは凄い人」

生きていれば良いことがある。そう思える瞬間だった。もしあの時焰と一緒に死んでいたら、こういう出会いはなかった。

（焰、あなたが生きられなかった分まで私頑張るから！）

斬魄刀

「では、次の人どうぞ」

合図で前に出る冬菜と竜王。

「……………」

「大丈夫です。私はなるべく抑えますから」

「……………」

あの日以来、竜王は冬菜に声をかけなくなっていた。他の人は話すようになったが、彼だけは恐ろしい者を見る目だった。

「それでは始めてください」

「行きます。縛道の四 這縄」

「くっ。こんな時間稼ぎの技なんて……」

「君臨者よ！」

“ 血肉の仮面・万象・羽ばたき・人の名を冠す者よ！”

“真理と節制”

“罪知らぬ夢の壁に僅かに爪を立てよ！！”

破道の三十三！！蒼火墜！！」

「なっ」

吹き飛ばされる竜王。

「すみません。これも勝負ですので」

「かっこいいー!」

謎に信者急増中。

「次の時間は、魂魄の魂葬の実習です。速やかに北流魂街の野原に集合してください」

「はい」

「意外と簡単だね」

浅打ちを引きずりながら、冬菜はつぶやいた。魂葬を終え、真央霊術院に向かう道のりを歩く。

魂葬が思ったものと違い、あっさりしていた為、冬菜はボーっとしていた。それは他の人も同じだった。しかしその心の余裕が命取りだった。

「ヴォオオオオオ！！」

空気を振るわせる咆哮。ずっしりと来る霊圧。

「虚だ！」

誰かが叫んだのと同時に、一同は二つの行動をする者に分かれた。逃げる者と虚に向かう者。冬菜は虚に向かっていった。

一番最初に虚に飛び込んだのは竜王だった。虚も相手が悪かった。一瞬で消滅した。

歓声が起こる。が、それもつかの間だった。あちらこちらから虚が現れた。

「きゃあっ！」

「ぐあっ」

現れた虚は次々と生徒に攻撃をする。殆どの者はその速度に反応できずにやられていった。

「みんな！！！」

「ダメだよ朝風さん！あなたが勝てるような相手じゃない」

「でも……見捨てるなんて…」

「先生たちを呼んでこよう」

その人の指示で何人かが霊術院に向かって走り出した。しかし冬菜はとどまった。

「そんなの待ってられない！見殺しなんて私が望んだ死神じゃない！！」

「朝風さん！！」

止められるのも聞かず、冬菜は虚の中に突っ込んでいった。

「やめてえええっ！！」

「逃げて！ダメだ！」

「私は…私は……」

皆を守りたいんだ！！！！」

《それなら俺の名を呼べ》

突然頭に響いた声。

《お前ならできるはずだ》

「名前は……斬氷丸!!」

瞬間、膨大な霊圧の風が冬菜を包み込んだ。その場にいた全員は何が起きたのか理解ができない。

風が晴れたときそこに立っていたのは、先程までの浅打とは違う、オリジナルの斬魄刀をたずさえた冬菜だった。

「皆を傷つけた罪を、償え!」

冬菜の周りから空気が凍りつく。いや、空気だけでなく地面までも。

「はああああっ」

持ち前のスピードで虚を翻弄し、全ての虚をたった一人で倒してしまった。周りに群がる人々、冬菜は、ゆっくりと倒れた。

「朝風さん!？」

「大丈夫、霊力を使いすぎただけだよ。急いで帰ろう」

「そうだね。朝風さん、休ませてあげないと」

目を覚ますと、そこは真っ白い部屋だった。霊子が充満していることから、ここが医務室だと分かった。

「私どうしたんだっけ？」

ふと、手に何かが当たった。見ると浅打とは違うオリジナルの斬魄刀。

「斬氷丸……」

そうだ、私は虚と戦ったんだっけ。それで倒せたのかな？そこは思い出せなかった。

思い出そうと考えると、医務室の扉が開いた。そこから現れたのは、隊首羽織を着た白髪の男の人。

「誰……？」

「私は浮竹十四郎。十三番隊の隊長だ」

“隊長”と聞いて、冬菜は慌ててベッドから降りた。

「ああ、そのままでもいい」

「あの…何故こんなところに？」

「君が朝風冬菜だね？」

「は…はい」

「来月から君には護廷十三隊に入ってもらおうよ」

「え!？」

思わず飛び上がる。何故、まだ真央霊術院に入学して一年も経っていない自分が、護廷十三隊に入れといわれるのか。全く理解できなかった。

「君の話は、護廷十三隊までよく噂が届いている」

「私の…噂が？」

「ああ。小さな女の子が特進クラスに入った、とね」

そんな噂がされていると思うと、恥ずかしくて顔が真っ赤になった。

「それに君は自分の斬魄刀を手に入れたようだしね」

「あ……………」

「君には十分な力がある。総隊長殿はそう仰られていた」

「……………」

「？」

「それで皆を守れますか？」

私は尸魂界ソウル・ソサエティに来る前、虚に殺されました。流魂街で初めて私を受け入れてくれた人が虚に殺されました。

だから私は死神になるんです。護廷十三隊に入ったら、皆を守れますか？」

「（虚に殺された？それなら何故この子は魂を食われていないんだ？）」

……………そうだね。守れるかどうかは君次第だ。君の気持ちのね」

「私の気持ち？」

その時、冬菜は護廷十三隊に入ることを決めた。自分の魂を分けた斬魄刀—————斬氷丸と共に。

十番隊

「朝風さん、こっちだよ」

「う、浮竹隊長!？」

入隊式の日、冬菜を出迎えたのは浮竹だった。

「そんな……態々……」

「いやいや。君の配属が決まったからね、その報告も兼ねてさ」

「ありがとうございます。それで、配属って？」

「朝風さんは十番隊だよ」

“十番隊”に極度の興味を見せる冬菜。

「十番隊って、天才少年が隊長を勤めていると噂の、あの十番隊ですか!？」

「あ、ああ。そうだよ」

突然早口で話し出した冬菜に、ビックリする浮竹。

初めて会ったときは、あまりにも弱々しいイメージが強かった為に、こんなにハッキリと話す冬菜が信じられなかったのだ。

しかし、それは安心感を生む物でもあった。

「十番隊は、この道をまっすぐ行けば着くよ」

「はい！ありがとうございます！」

お礼を言うと、冬菜は全速力で道を走っていった。浮竹はその姿を、ただ眩しそうに見送った。

十番隊・隊舎 執務室

ここで、一人の少年が書類の前に奮闘していた。銀色の髪に碧緑色の瞳は氷を思わせる。彼は、十番隊隊長・日番谷冬獅郎。

一方でソファに寝転ぶ、蜂蜜色の髪の女性死神。彼女は、同じく十番隊副隊長・松本乱菊。

「たいちよくなんか暇です」

「暇なら仕事をしやがれ。いつまでも寝てるんじゃないやねえ」

「それより、今日くる予定の新人。遅くないですか」

「気になるのなら、自分で迎えに行け」

冬獅郎の言葉に、目を輝かせる乱菊。

「本当ですか！」

「但し、あとで仕事はみっちりやってもらうからな」

「え」

乱菊は、子供のように頬を膨らませた。冬獅郎の眉間にしわが寄る。それに気づくと、冗談ですよと流し、執務室を出て行った。

「つたく」

書類に手を伸ばす。それは今日来る新人隊士の書類だった。

「朝風冬菜、真央霊術院を半年で卒業、か。随分とすごい奴が来るな」

内心、松本よりも役に立ってくれよ、という気持ちでいっぱいだった。

「あつれ〜？どこに行っちゃったんだろう？」

一方、執務室を飛び出した乱菊は、冬菜を探していた。入隊式は既に終わっており、そこには誰もいない。近くにいる人は誰も見ていないという。唯一の手がかりは、浮竹と一緒にいるのを見た、という情報だけだった。

「せめて浮竹隊長がいればいいんだけど……」

その時、乱菊の目に銀色の髪が映った。

「あれ？隊長、こんなところで何してるんですか？」

しかし、すぐに冬獅郎ではないことに気がついた。何故か、それは小さいから。いや、冬獅郎も小さいが、今日の前にいる人物は更に小さい。

どれ位かというと、腰に下げた斬魄刀を引きずってしまうほど。

それでも銀色の髪に緑の目は、冬獅郎そのものだった。

乱菊が目を丸くしていると、その人物は乱菊に声をかけた。

「あ、あのっこの近くに十番隊の隊舎はありませんか？」

「へ？」

「私、今日から十番隊に配属された、朝風冬菜といいます。ですが、途中で道に迷ってしまい……」

なるほど、乱菊の中でやっと話が繋がった。

「十番隊の隊舎はあっちよ。私は十番隊副隊長の松本乱菊よ。よろしくね」

「はいっ！ よろしく願います」

「それじゃ、隊長が待ってるわ。いきましょ」

乱菊は冬菜の手を引いて、隊舎へと歩き出した。

「たっ
だいま」

「遅い！」

冬菜を連れ、乱菊を出迎えたのは、冬獅郎の怒鳴り声。

「新人を迎えに行くのにどんだけ時間掛かってんだ！」

「仕方ないじゃないですか。この子迷子になってたんですよ」

「で、そいつはどこだ？」

「やだな、隊長。ここに居るじゃないですか」

しかし、冬獅郎の位置からはその姿が見えない。実は冬菜からも冬獅郎が見えていない。

その最大の理由は、冬菜の身長。小柄な冬菜は、先程まで乱菊が寝そべっていたソファの陰に隠れてしまっていた。

跳ねてその存在を示すが、相手に見えているのはせいぜい髪。

「こっちに来りゃいいじゃねーか」

見るに見かねた冬獅郎は、呆れ顔で言った。乱菊に手を引かれながら、冬獅郎の前まで行く。

「初めまして。朝風冬菜です」

「日番谷冬獅郎だ」

「「!!」」

お互いを見て、驚く二人。無理もない、さっきも言ったがこの二人はあまりにも似すぎていた。

それ以前に、お互い、昔どこかであったような気がしていた。

「どうしたんですか隊長？突然固まっちゃって」

「あ、いや。何でもない」

「朝風も」

「すみません。何でもないです」

慌てて目をそらす。乱菊は一人、首を傾げていた。

「そういえばさ、アンタさっきから斬魄刀、引きずってるけど大丈夫？」

「あ……。これは…仕方がないんです。私、小さいから……」

「それなら隊長みたいに、背負っちゃえば？」

「それは前に友達に言われて試してみたんですけど……その……」

顔を赤らめる冬菜。しばらくモゴモゴし、やがて言った。

「手が……届かないんです……」

「そう…なの」

流石の乱菊も、絶句。

「それなら仕方ないわね。あとで私が如何にかしてあげるわ」

「ありがとうございます」

ペコリと頭を下げる冬菜に、乱菊は笑いかけた。

そこでずっと黙っていた冬獅郎が口を挟んだ。

「さて、松本。お前が溜めた分の仕事、さっさと終わらせろ」

「ええ~~~~~」

ふてくされる乱菊を、ただ苦笑いするしかない冬菜であった。

瀨靈廷

「朝風」

「は、はいっ」

ドタバタ

「朝風!!」

「はいっ!」

ドタバタ

冬菜が入隊して早一週間。この日の十番隊は少し慌だたしかった。

仕事慣れしてきた冬菜を、隊士達が使いつ通りにされていたのだ。そして冬菜は知らなかったが、つい先日、瀨靈廷では一大事が起こっていた。既に解決済みだが。その処理もあったので忙しかった。

「疲れた……」

「お疲れ様」

目の前に運ばれてきた、レモンティー。

「ありがとうございます、松本副隊長」

「いいのよ」

冬菜は一口レモンティーを飲むと、はあ、と溜息を吐いてソファに寝転がった。

「それにしても」

乱菊はテーブルに積まれた書類の山を見た。全て今日のうちに冬菜がこなした仕事。それは、テーブルから溢れんばかりの量だった。

「よくこんなにできたわね」

「いえ、新人ですのでこれぐらいしないと」

「それでも、根を詰め過ぎだ」

「あ、日番谷隊長」

そこに現れた冬獅郎。

朝から働き詰めの冬菜を心配していた。

「えへへ、大丈夫ですよ。これでも体力はある方ですから。生きてた頃は自分のことは自分でやっていたので、良ければ料理とかもやりますよ」

「……………（生きていた頃、か）」

「隊長、どうしました？」

「いや。なんでもない」

突然黙り込んだ冬獅郎を不審に思う冬菜だったが、少し首を傾げただけで終えた。

「そうだ隊長。他に何か仕事ありますか？」

「お前まだ働く気か？」

「はい！」

元気に答える冬菜に冬獅郎は呆れかけていた。

その元気はどこから来るのだろうか。それが冬獅郎と乱菊の疑問だった。

「ハア。それじゃあ瀨霊廷通信を八番隊にでも持っていくてくれ」

「わかりました！」

差し出された漣靈廷通信をひったくるように取ると、勢いよく隊舎を飛び出していった。乱菊は、子供の旅立ちを見守る親のような目で見送った。

「それにしても隊長。あの子、八番隊がどこにあるか分かってるんですか？」

「……さあな」

「朝風って入隊した日も迷子だったんですよ」

「……………」

流石の冬獅郎も思わず絶句だった。

「わーい。見事に迷子だ」

と言いながら、実はここは八番隊の敷地内。しかし、冬菜は気づかない。

そんな時だった。

「あんらく可愛い子がいるじゃないか」

「ほえ？」

そこにいたのは、女物の着物を羽織った死神。八番隊隊長・京樂春水。相当の女たらし。

「あ、あの…?」

「ボクは京楽。八番隊隊長なんだ」

「八番隊ですか?よかった!私、この前十番隊に配属されました朝風冬菜です!」

冬菜の笑顔に京楽も、笑顔になる。

「そうだ。隊長に頼まれて瀨霊廷通信もって来ました!」

「ご苦労さん。七緒ちゃんもいるし、ちょっと寄っていきなよ」

「え?でも、まだ仕事の途中ですし…」

「大丈夫。日番谷隊長にはボクから言っておくから」

「で、でも……」

戸惑う冬菜をよそに、京楽は半強制的に冬菜を隊舎に連れて行った。引きずっているのは全く気づいていない。

「京楽隊長」

冬菜の抵抗も無駄であつた。

「隊長！ 一体どこに行っていたんですか！」

二人を迎えたのは怒鳴り声。冬菜にとって何か既視感。デジャヴ 勿論、冬獅郎と乱菊のやり取りである。

「あれ？日番谷隊長……じゃ、なさそうですね。誰を連れてきたんですか？」

「七緒ちゃん、この子は十番隊に入ったばかりの朝風冬菜ちゃんだよ」

「朝風……ああ。天才って噂だったあの子ですか。何ナンパしてるんですか」

「ナンパじゃないよ」

二人のやり取りを見ながら、対応に困る冬菜はとりあえず笑顔でいた。それに気づいた七緒は、席から立ち上がった。

「とにかくお茶を用意するので、貴賓室で待っていてください」

「あ、はい」

そのまま貴賓室に案内される。冬菜の頭の中は、“隊長に怒られる”と言う考えで一杯だったりする。

待つこと一分。そこに現れたのは七緒ではなく、京楽。しかも、他に誰かを連れていた。

「おまたせ」

「……なんで伊勢副隊長じゃないんですか？」

「冬菜ちゃんに他の死神の皆を紹介してあげようと思ってね」

「光栄ですが、何も今じゃなくても……。日番谷隊長が……」

あまりのきらきらの笑顔で言ってくる京楽に既に対応の仕方を失っていた。とりあえず苦笑い。それしかできなかった。

「それじゃ、紹介するよ。こっちが九番隊副隊長の檜佐木修平」

「どうも」

「で、こっちの彼が三番隊副隊長の吉良イヅル」

「よろしくお願いします」

紹介にあわせてそれぞれ頭を下げる。冬菜も椅子から下りて頭を下げた。

「この二人はボクの飲み仲間なんだよ。更に松本副隊長も加わると、最高なんだよね」

「まさか……」

京楽が考えていることが一瞬で分かってしまった冬菜。まさかと思
いながら口にした。

「まさか、私を巻き込んだの飲み会ですか!？」

「さっすが。靈術院指折りの天才だね。勘がいいや」

予想通りの答えを返されて、冬菜は顔を青ざめた。

「ちよっ！京楽隊長！私、まだ未成年ですよ！！それに日番谷隊長
に怒られちゃいます！！」

「だ〜いじょうぶ。死神に歳とか関係ないから」

「いや！でも、死んだ年齢とか考えてもカンペキに未成年ですって
！」

あまりに京楽に反対意見を出す冬菜を見て、檜佐木と吉良は目を丸
くしていた。

「あの子すごいですね。普通に隊長に反抗できる平隊士なんて始め
てみましたよ」

「そうだな」

「とにかく私はお酒は…」

「そんなことは言わずに」

グイッ

「え!?! 京楽隊長、何やってるんですか!?!」

「ん? 何ってお酒飲ませてあげたの」

「今のでこの子フラフラですよ!?!」

強制的に飲まされて、座っているのもままらない状態だった。この時、二人は七緒か冬獅郎のどちらか、もしくは両方に怒られるだろうな、と思っていた。

「ホラホラ、君たちも飲んで」

「何やってるんですか!!」

お茶を運んできた七緒が見たのは、お酒で潰れている冬菜と酔っ払って騒いでいる京楽・檜佐木・吉良の三人。

三十分後、こっそり絞られた京楽によって冬菜は十番隊に届けられた。勿論冬獅郎も京楽をこっそり絞り、乱菊はそのまま京楽に付いて行ってしまった。冬菜の介抱に忙しかった冬獅郎がそれに気づいたのは、一時間後だった。

総隊長令

「そろそろじゃの」

十番隊 執務室

「もうそんな時期か」

ずっと一枚の書類とにらめっこをしていた冬獅郎が、ふと呟いた。

「え？何の時期ですか？」

「現世駐在任務。朝風に総隊長令が出た」

「ああ。朝風が入隊してもうそんなに経つんですね」

「現世駐在任務ってなんですか？」

いつの間にかいた冬菜が尋ねた。居たことに気づかなかった二人が驚いたのは言うまでも無い。

「朝風！いつからいたのよ！」

「今です。それで、それってなんですか？」

「新人が必ずやることだ。現世に一ヶ月間滞在して任務の経験を積む」

目が点とは、まさしくこの事だろう。冬菜の大きな目は驚きに見開かれ、確かに点になっていた。

「それって絶対ですか？」

「ああ。総隊長令だからな」

更に目が大きく開く。

「朝風。どうしたの？」

「いえ。大丈夫です。それで一体どこへいくのでしょうか？」

「空座町だ」

町の名前を聞いて、ずっと開かれていた目が安心で閉じられる。その様子を不審に思わないわけが無い。

「私、現世ってトラウマなものですから……」

「トラウマ？」

「けど、町が違うので安心しました」

「心配するな。駐在任務は俺もついて行く」

その言葉で、今度は乱菊が目を見開いた。

「隊長がいなくなったらこの隊、どうするんですか!？」

「お前がいるだろう」

「そんな」

泣き崩れる乱菊であった。

「出発は明日だ。用意しておけ」

「はいっ」

現世

一番隊 隊舎

「これより、十番隊平隊士・朝風冬菜には、同じく十番隊隊長・日番谷冬獅郎の付き添いで、一ヶ月の現世駐在任務に向かってもらう。準備は良いか？」

「は、はいっ」

「それでは行って参れ」

隊舎を出ると、冬菜と冬獅郎は尸魂界と、ソウル・ソサエティ現世を繋ぐ穿界門へと向かった。

冬菜は緊張しているのか、ずっと黙りっぱなしである。冬獅郎は、そんな冬菜の事を考えながら、黙って歩いていた。

「着いたぞ」

目の前にそびえ立つ、大きな門。これが旋廻門だ。

「穿界門の中は、断界が襲ってくる。運が悪ければ拘突に飲み込まれる。気を抜くな」

「うう…穿界門を通るのって、初めてだから緊張します」

冬菜の言葉に、冬獅郎は耳を疑った。

普通は、真央霊術院で実習として生徒を短期間現世に置く。その際に穿界門を通るのだが、冬菜はやっていないと言う。

「私、成績がトップ過ぎて別待遇だったのと、卒業するのが早すぎたのが重なって、実習をやってないんです」

「そうか……。それじゃあ尚更だ。絶対に気を抜くな」

「日番谷隊長！穿界門の準備、終わりました！」

「いくぞ！」

「はい！」

同時に地面を蹴る。

二人の姿は、穿界門の向こうへと消えていった。

空座町

ここ、空座一高には、不思議な生徒がいた。

その中の一人、幽霊の見えるオレンジ髪青年・黒崎一護は、死神代行。

「なあ、ルキア。なんか変な感じしねえか？」

名前を呼ばれた少女・朽木ルキアは、面倒くさいと言うように答えた。

「変な感じとはなんだ」

「なんて言うかさ、よく分かんねえけど、知らない霊圧が近づいて
いるって言うかさ」

言われて、ルキアは伝令神機を確認した。ルキアは、護廷十三隊十
三番隊平隊士だ。

「別に、虚が来ると言う指令は来ていないが……」

「そうじゃなくって！死神だよ、し・に・が・み・！」

「え？誰か死神さん来るの？」

そんな二人の会話にはさまって来たのは、盾舜六花を使いこなす、
井上織姫。巨乳の持ち主で、相当な天然少女である。

「いや、そんな気がするだけだ」

その時、教室の扉が音を立てて開いた。

「ほくら、席について！転校生、紹介するぞ」

先生に続いて入ってきたのは、

「んな！？冬獅郎！？」

「何だ黒崎、知り合いか？それなら、色々と教えてやれよ」

「いや、あの、ええええっ！？」

そして放課後。

「日番谷隊長、何故現世に？」

「新人隊士の現世駐在任務の付き添いできている」

「げんせちゅうざい……なんだそりゃ？」

「死神は、護廷十三隊に入ると、経験を積むために現世に向かわされるのだ」

「お、おう……？」

いまいち意味が分からずに、曖昧にうなづく一護。それを余所にルキアは質問を続けた。

「それで、その死神と言うのは？」

「朝風、いるんだろ？入って来い」

廊下から物音が聞こえる。

一護は、朝風という名に聞き覚えがあり、余計に混乱してきていた。

廊下から現れたのは、冬獅郎と容姿がそっくりの少女。躊躇い気味の深緑色の瞳に、風に揺らぐ水色がかった銀髪。

「「あああああああああ！！！！！！！」」

一護は彼女を見て、冬菜は彼を見てお互いに叫んだ。

「く、黒崎さん！？」

「何だ朝風。黒崎と知り合いだったのか？」

「いいえ、一生のライバルです！」

その言葉に、冬獅郎・ルキア・織姫は、頭に？マークを浮かべ、一護は、苦笑いと困惑の混ざった表情となった。

「えっと、なんだ。流魂街で虚に襲われてるところを助けたらさ、何でか“なんで助けた！”って、怒られちまって……。

そっか、マジで死神になったのかよ」

「当たり前です。あなたを倒すまで、私は死にませんから」

小さいくせに物騒なことをいう子である。

「あなた、名前はなんていうの？」

それに対して、持ち前のほんわかムードで質問をする織姫。そのムードに釣られるように、冬菜もにっこりと笑った。

「朝風冬菜、十歳です！よろしくです、織姫さん」

「あれ？何で名前を？」

「にひっ 実は朝から廊下に潜んでました！」

「つか、死神に歳なんてあんのか？」

「普通はないのだが」

「へ？」

一護とルキアの会話に冬菜は目が点になった。

死神は、普通生きている頃の記憶を持っていない。死んでからの月日を問わずに。

しかし、冬菜にはしっかりと記憶があった。そして、自分が何歳で死んだのかも覚えていた。

「む。なんかこの話になると、みんな冷たいです」

ほっぺを膨らました冬菜はまるで口に団栗を溜めたりスのように見えた。

「そういえば隊長。隊長が学校に行ってる間、私どうするんですか？」

「ん…そうだな」

「というかお前ら、住むトコあんのか？」

一護に言われて、そういえば、という顔になった二人。思わず“気づけよ”と心の中で突っ込んだ三人だった。

「良かったら、ウチに泊まらない？」

そこで立候補したのは織姫だった。織姫はアパートに一人暮らしをしている。

「おお。織姫さんがいいのならば。ね、隊長♪」

「ああ、そうだな」

顔をそらし気味に言った冬獅郎に不信感を持った一護は、こそつと、冬獅郎の耳元でささやいた。

「お前、コイツの笑顔に負けてるよな」

「黙れ黒崎！」

どうやら星らしい。

「だから、私たちが学校に行ってる間は、ウチにいていいよ」

「ありがとうございますっ」

冬菜は、嬉しさの勢いで織姫に飛びついた。織姫は、うまく抱きかかえ、自分の子供のように撫でた。

そのときの冬菜の顔は、ネコみたいだったとか違うとか。

織姫のポイズンクッキング

現世駐在初日。

冬獅郎と冬菜は、誘われるがままに織姫の家へと向かった。そしてこの二人以外にも、織姫の家に向かう人物がいた。

「……何故あなたたちも同行するのですか？」

「別にいいだろ？ 歓迎会をやってやるんだからよ」

その人物とは、一護・ルキア・雨竜・チャドの四人。

冬獅郎と冬菜の歓迎会をやるうという織姫の提案により、このメンバーで行くことになったのだが……。

「全員入りきるのですか？」

問題は、この大人数がアパート暮らしである織姫の家に入りきるのか、ということだった。

「大丈夫だよお、この前改築してもらったから」

「お前、そんな事してたのかよ…」

呆れる一護だったが、本からやることなすことが謎だらけな織姫だったので、それ以上は突っ込まないことにした。

そして、家に着くと、織姫は早速料理を作り始めた。が、

「織姫ちゃん特製レシピだから、だくれも来ちゃダメだよ」

と、一言残し、台所へと消えていった。誰も行くことはなかったものの、台所から、料理に関しては聞こえてはいけなような音がしたりと、待っているだけの全員を不安にさせた。

そして十分ほどしたとき、出来上がったものを持って、織姫が姿を現した。

「じゃじゃ〜ん。織姫ちゃん特製のチョコのみ焼き!!」

見た目はお好み焼き、香りは甘い。名前どおりの料理だった。

「これはチョコなのか？お好み焼きなのか？」

心配になった一護が聞いた。すると、織姫は誰も予想ができない答えを返した。

「うーんとね、たこ焼きより？」

「どっちでもねえのかよ……ッ！」

流石に食べる気が失せた。しかし、子供の好奇心と言うべきか、冬菜だけは興味を持っていた。

包丁を使って切り分けると、自分の皿に盛り付けた。

「いっただっきまゝす」

チョコのみ焼きが、ゆつくりと冬菜の小さな口に消えていった。全員が感想を待って冬菜を見つめる。

「おいひゅっ!!」

「マジかよ!？」

冬菜の感想を聞いた一護は、同じようにそれを切って口にした。

「あ、意外とありだ」

「本当か!？」

一護も認めたために、他もチョコのみ焼きに手を出し始めた。思ったよりも食べられる物であり、チョコのみ焼きは三十分ほどで無くなった。

「織姫さん、コレ、おいしかったです!」

「そっかあ、ありがとう!」

「ム、結構うまかった」

「そうだな」

実はこの時、自分の料理を褒めてもらったことで気を良くし、あることを考えていた。それは、

「明日のお弁当、全員分作ってあげるよ?」

織姫の満面の笑みに勝てるものがあるはずも無く、次の日に全員が不思議な弁当を食べることが決定した。

次の日、空座一高で食中毒（？）によって、倒れた生徒が五人ほどいたとか違うとか。

この出来事は、このメンバーにとって忘れられない思い出として残ったであろう。そして、織姫が本当は料理ができない（？）と言うことが判明したときでもあった。

因みに冬菜はというと。

「メツチャおいしいよな」

普通に食べられる、希少な人物だった。

久々の虚とのご対面

澄み切った冬空が広がっている。

そんな空座町の一角で、鼻歌混じりの叫びが聞こえていた。

声の主は、というと

「ひーまーだーひーまーでーすー」

冬菜なワケでして。

織姫や冬獅郎が学校に行ってしまったせいで、暇をもてあましていた。

因みに、冬菜は『ちびっ子の集まりに居たくない』という個人的な理由から、

学校には行っていない。

自分もちびっ子だろう、と突っ込みを入れたら負けである。

「たいちょう暇で死んじゃいます〜ヘルプです〜」

どういうわけか、冬菜は若干冬獅郎を遊び相手とも見ているらしい。

暇なら高校に潜入してしまえばいいではないか、と思うかもしれないが、

そこは冬獅郎にキツク止められていた。

子供の好奇心によって何をしでかすか分からない、

と言うのが理由に挙げられる。

「鬼〜松本副隊長に言っちゃいます〜」

本人がいない所為か、言いたい放題の冬菜。

もしここに本人がいて言っているのが乱菊ならば、ただではすまないだろう。

あまりの退屈さに、床をゴロゴロと転がり始める。

が、

「あ、そうだ。生きてた頃の一人遊びでもやろっかな」

すぐにアイデアを見つけ、起き上がった。

そして、とても、小さな女の子とは思えないような体勢で考え始めた。

しかし二十秒後。

「生きてた頃に遊んだ覚えなんてないしーっ」

結論、無理。

生まれてから常に一人同然の世界で生きてきた冬菜は、遊びなんてしたことがなかった。

「ひーまーじゃー」

そしてまた転がりだすのだった。

「ひーっがーやーたーいーちよー」

「ん？」

授業に取り組んでいた冬獅郎は、誰かに名前を呼ばれた気がして顔を上げた。

「冬獅郎、どうかしたか？」

その様子を不思議に思った一護は、小声で聞いた。

が、冬獅郎は何かの聞き間違いだろうと思い、『何でもねえ』と言って、再び集中を授業に向けた。

しかし。

『た〜いちよ〜』

確かに聞こえる。冬菜の叫び声が。

「あのヤロー」

思わずぼやく。

学校につれてくると何をするか分からないために家においてきたが、それが逆に不満らしい。

家においていくと決まって騒ぐのだ。

——アイツは任務を遊びかなんかと間違えてないか？

何度かそんな考えが浮かぶ。

数ヶ月前にやってきた小さな新人隊士。

始めは仕事をてきぱきとこなす良い部下だと思っていたのだが、

慣れてくるうちに緊張が解けたのか、それとも常にフレンドリーに接する乱菊が原因なのか、

自分に対する態度が何となく乱菊に似てきた気がする、

そう思うようになっていた。

とにかく、授業が終わったら電話か何かで注意しよう、

そう結論付けて、授業に戻った。

キンコーンカーンコーン

「これで一時間目の授業を終わりにする。

起立 礼」

先生が号令をかけ、授業が終わる。

それと同時に、冬獅郎は携帯を取り出した。

「冬獅郎、授業中どうしたんだ？

なんか、ずっと上の空だったじゃねえか」

不意に声をかけられて、手を止める。

「黒崎。何でもねえって言っただろ」

「もしかして、朝風のことか？」

ギクリ。そんな効果音が似合いそうな表情が冬獅郎の顔に表れる。

一護は、やっぱりなと言いたげに頷いた。

「ずっと、『た〜いちょ〜』って叫んでたの、あれって朝風だろ？」

さらに、ギクリという顔になる。

そのやり取りを見ていた織姫が話に入ってきた。

「やっぱり冬菜ちゃんも連れてくればよかったんだよ。」

ちっちゃい子一人は可哀想だし」

「連れてきちゃったならそれこそアイツは遊びかなんかと勘違いする
 だろ」

冬獅郎としては、現世に来ているのが任務であることを忘れて欲しくないのが最優先だった。

みんな（と言っても一護と織姫の二人だが）の言うことを流して冬
 獅郎が、また携帯を弄り始めたときだった。

【ヴオオオオオオオオオオオ!!!】

「！！！！！！」

虚の叫び声だった。

「虚か。いくぜっ」

「待て黒崎」

代行書を取り出した一護を、冬獅郎が呼び止めた。

「なんだよ。倒しに行かなくていいのか？」

明らかに不満っ気丸出しの一護だが、それに対して冬獅郎は静かに言った。

「その為の朝風だ」

一方、井上宅でゴロゴロしていた冬菜も気づかないわけではない。

手早く義魂丸^{ソウル・キャンディ}を取り出して飲み込む。

「ここで、大人しくしててね？」

「はい」

それだけ言うと、部屋の窓から外に飛び出した。

霊圧を探って虚の位置を把握する。

本来ならばこんなことをするまでもないのだが、何故しているのか
と言うと

P i P i P i P i P i P i P i P i

「来るの遅っ!?!」

伝令神機からの連絡が遅かったためである。

今度は伝令神機で場所を確認する。やはりこの方が早い。

「空座公園を中心に半径一キロか。限定されてて分かりやすいや」

その情報を元に、公園に向かって大きく跳躍した。

虚は公園にいた。しかも魂魄を襲っていた。

「うわーめんどくせー」

ブツブツと言いながらも斬魄刀に手をかける。

「おーいその化け物ー。私が相手だからこっち向きやがれバカヤロー」

最近冬菜の性格が壊れてきている気がするが、そこは割愛で。

冬菜が来たことに気づいた虚は、魂魄を離れ冬菜に向かって走り出した。

「滅ッ」

小さな体に不釣り合いな斬魄刀を振り上げて、虚を文字通り、一刀両断した。

虚は消え、魂魄と冬菜だけが残された。

「少年、元気か！」

笑顔で言う冬菜。

さっきまで虚に襲われていたのだから元気なわけがないだろう。

しかし、そんなの彼女にはどうでも良い。

内心、さっさと魂葬を済まして帰りたい、と言うのが本音。

「んじゃ、さっさと魂葬するよ」

小さな少女が刀を振り回していると言う時点で相当ビビリな魂魄だったが、

有無を言う暇なく、冬菜によって魂葬された。

ひらひらと地獄蝶が空に舞っていく様子を見て、冬菜はふと、今までずっと抱いてきた疑問が出て来た。

自分が殺されたとき、魂葬された、と言う記憶が全くないのだ。

虚に殺され、流魂街で目を覚ますまでの間に、魂葬というシチュエーションが全くなかったように思えるのだ。

一生懸命思い出そうとしてもできなかった。

「ま、いいや」

結局諦めて帰ることにした。

そして、来たときと同じように、家に向かって大きく跳んだ。

「ただいま」

「……」

夕食の買出しまで済ませて学校から帰ってきた織姫と冬獅郎。

そんな彼らを待っていたのは、

「こ、こらーっ返せーっ」

「びーっだ」

未だに死神姿の冬菜と、彼女から逃げている義骸。

「何やってんだお前ら」

「あ、隊長！グッドタイミング！！」

ソイツ捕まえてください！」

「だから何やってんだっつーの」

ブツブツいいながらも、髑髏の描かれた手袋をはめる。

そして冬菜の義外に向かって平手を押し出した。

「はうっ」

その口から義魂丸が飛び出し、冬菜はそれをキャッチするのと義骸に入るのを同時にやった。

が、勢い余ってたのか、前にずっこけた。

「だ、大丈夫!？」

「だいじょぶだす、織姫ひゃん」

鼻を押さえながら泣き目で答えていた。

グスン、と一回鼻を吸ると、経緯を話した。

虚退治から帰ってきたまではよかったけれど、何故か義魂丸が義骸を返してくれず

今の今までドタバタと鬼ごっこ(?)を繰り返していたとのこと。

ただそれだけ。

「はあ？」

あまりの事に突っ込む言葉すら失った冬獅郎だった。

久々の虚とのご対面（後書き）

◇冬菜の義魂丸◆

リッキー

お調子者。あわよくば義骸を自分の物にしてしまおうと思ったりする。

語尾は「〜っぺ」

（例）「この体はウチのもんだっぺ！」

お知らせダス

えゝ氷の少女を心待ちにしている人、すんません。

しばらくこの小説はお休みします。

「何言うてんねん」て思うかもしれませんが、ネタの整理が追いつかないのです。

ネタ案をブリーチをよく知る友達に見せたところ、ダメだし百個（実際そんなじゃないけど）を食らいました。

その修正をすべく、しばらく投稿はできません。

というか寧ろ、投稿済みの話も少しずつ修正していくかもなので、内容が変わってしまう可能性大です。

それまでのご辛抱を願えますでしょうか？

頭の整理がついたら再会しますので、それまでの別れです。

それでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9595v/>

ブリーチ 氷の少女

2011年12月3日16時52分発行